

○鈴木 佐代 沖田 富美子 (日本女大)

〈目的〉住生活や住居観は、ライフステージや社会的時代背景によって変化していく。本研究では、住居選択への家族状況や社会状況の影響を明らかにするための基礎的研究として、同世代の家族の過去約 20 年間の住居選択行動を把握する。

〈方法〉都市と地方における同世代の家族の住居選択行動を把握するために、東京都と群馬県の学生(大学・短大・専門学校)を対象に自記式アンケート調査を行った。調査時期は 1996 年 1 月、7～8 月である。有効サンプルは、東京近郊居住家族 65 世帯と群馬県居住家族 63 世帯である。調査内容は学生の誕生時から現在までの家族の居住歴であるが、本報では住居更新の方法や時期についてまとめたものを報告する。

〈結果〉①住居の更新の仕方として最も多いのは、東京・群馬ともに「1 回転居」である(約 33%・約 22%)。東京では複数回の転居も少なくないのに対して、群馬の場合は「住み続け」が約 4 割を占める。「建替え」をした家族は東京・群馬ともに約 14%おり、いずれも回数は 1 回である。②住居更新の時期は、転居と建替えで異なり、転居は子が小学校低学年までに、建替えは小学校高学年以降に多く行われている。この傾向は東京でより顕著である。③東京では同じ住居形態での転居(戸建→戸建、集合住宅→集合住宅)が多く(約 6 割)、一方群馬では、戸建てへの転居(戸建→戸建、戸建以外→戸建)が過半数を占める。④転居に伴う居住地の移動については、東京では約 28%のものが県外への転居を経験しているのに対し、群馬では約 13%である。